

防長に息づく石造 刎橋の伝統が結集

おちあい 落合の石橋



関ヶ原の合戦の後、毛利輝元は周防・長門に移封され、慶長9年（1604）、日本海側の萩に築城します。そして、萩を中心とした領国内の街道整備を行います。そのなかで萩と瀬戸内の三田尻港を結ぶのが萩往還で、総延長11里34町（約53km）、幅2間（約3.6m）のこの道は、国道262号とほぼ重なるように進み、防府で重要幹線交通路である山陽道、現在では国道2号に結節します。藩内各地に通じる往来の中では、特に政治的に重要な交通路としての位置づけでした。それを象徴するのが「御成道」とも呼ばれた藩主の参勤交代の路線であった点です。

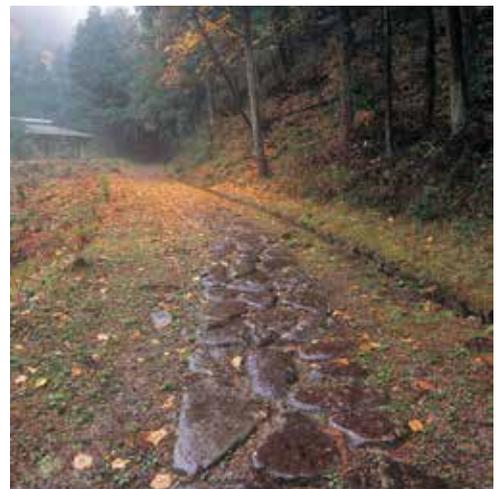
唐樋の札場を起点とする萩往還は、橋本川に架かる大橋を渡り、悴坂を越えて明木市、佐々並市を過ぎると周防長門の国境になります。この峠を下ると往還の中間地点となる一の坂で、それから鱈山峠（佐波山）を越えると宮市に入り、終点の三田尻に至ります。

萩往還のほぼ中間点となる佐々並川支流の落合川に、長さ約2.4m、幅1.7mの石造刎橋が架かっています。刎橋は橋脚が設けられない場合に用いられる構造で、兩岸から支えとなる柱状の石材（片持梁材）を土中に深く埋め込み、それを石で押さえて川側に突き出した上に桁を渡して橋としたものです。

この落合の石橋の桁は幅70cmの板石が3列載せられており、江戸時代後期の架設といわれています。ちなみに平成16年（2004）の台風で、この石橋が右手護岸を流失した際、突き出した梁材の2倍以上の長さが地中に埋め込んであることが判明しています。

山口県の日本海側には玄武岩を用いた刎橋、大寧寺の盤石橋（長門市）や平安橋（萩市）が、瀬戸内海側では花崗岩を用いた独特な石造刎橋があります。瀬戸内側の塩田地帯であった三田尻では、製塩用の石炭や製品の塩俵を運ぶ上荷船の航行の妨げにならないように背の高い刎橋が選ばれたようです。橋周辺の環境は大きく変わりましたが、今でも柳井市南浜の天津橋、防府市の桝築欄干橋、山口市秋穂二島の長浜欄干橋などを目にすることができます。玄武岩らしい板石が一部載る落合の石橋は、陰陽両者の特徴を併せ持っているといえます。

位置図



萩往還 一の坂



大浜塩田への通路として架設「桝築らんかん橋」（防府市）



萩城の外堀に架かる石造刎橋「平安橋」（萩市）



登録有形文化財「落合の石橋」（佐々並川支流落合川）